

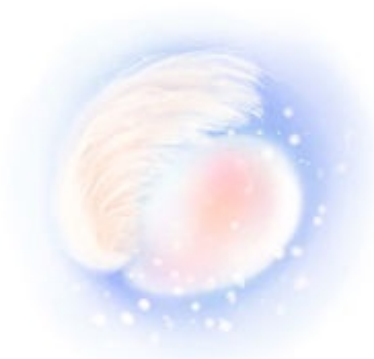
眠る傍ら

Short Story's

Kiss



迷夢



1月に入ってようやく厳しい寒さが巡って来たと云う...。
もうじゅうぶん。
とっくに凜冽な冷えで身体が凍える毎日を過ごしているのに。

これ以上、たくさん。

そう思いながらTVを消した。
気象予報士の女の子の着ていたコートのチェックも怠らなかった

TV局が用意したにしては地味で、自前で買ったにしては大人びてる。

つまり、30路近い私には無難な線だ。

...今年は、あんなの買おうかな。

帰省する予定だった兄家族にあげ損なったお年玉も使っちゃおう。

去年買って貰ったこのコートには思い出が多過ぎるから。

なのに、もうどこの店もSaleに入っていて、価格はお手ごろでも品薄の状況。

ちょっと良いなと思うものがあったも「ワンサイズ」とかでMばかり。

日本人の体型は大きくなってるのは、そんな商売してたらその内潰れるんじゃないの？

...なんて。

ひとりで歩いていると暇なものだから、そんな不満ばかりが頭を占める。

気づけば、去年は元カレと歩いた順路を、ひとりで...

馬鹿にしたの。

平凡な私の為に車道側を歩いて。

どこでもいるような女なのに「好き」だなんて言うから。

欲しいものをプレゼントしてくれて、逢いたい時に都合をつけてくれるから。

1年目の秋には、慣れて甘え過ぎちゃった。

巻きついてた片腕が私のものだと思信した。

馬鹿だったの。

求めるものが、1つになった影の外側ばかりになってしまふなんて...

今、欲しいものがあなたの腕だって言っても、もう叶わない。

何度連絡をしても繋がらず、謝ってもメールの返事は無くて…。

冬空に祈ってもサンタクロースは来なかった。

熱くなった身体を冷ました、華やかなビルの質素な屋上。

警備員がいるのに互いのジャケットとコートに手を潜らせて互いの素肌をくすぐり合った。

今みたいに、きんきんに冷えた星の下で、唇の奥までもくすぐり合ってた。

頭の中まで熱くなって、早足で向かったホテルの看板が見える。

別れてから3ヶ月ちょっと。

ようやく三冬(みふゆ)を越えられた。

これから来る冬は、どうだろう…なんて考えてたら、コートを通す風が益々冷たく感じる。

もっと防寒の効いたコートを買えばいい。

なにもかも、新しく始めよう。

夜景に笑顔で別れを告げる。

エレベーターを目指して…振り返って泣くとも知らずに。

「元気そうだね」

照れた顔の元カレが身を縮めて、北風に耐えて立っていた。

「買い物に来たんだ？俺、新しいジャケット捜してるんだけど見てくれない？」

優しく話しかけないでよ。一緒に買ったジャケットを買いなおすの？

私、友達になんて戻れないよ。

「…私も、新しいコート捜してるの」

ほら、素っ気無く言うつもりが涙声になっちゃった。未練がバレバレじゃないの。

「捜してやるよ」

そう言って元カレは肩に手を回した。

まるで、3ヶ月前のように。

初めてのデートのように。

キスも無いまま私達はエレベーターへ向かった。

そうだね、ひとりで歩く道も、悪くは無かったよ。

今、あなたの為に何が出来るかを考えられる。

あなたの為の、私になれたから…。



淡雪のような、白肌。
乳房の膨らみと腰の稜線は
——銀嶺を想わせる。

あなたが、そう褒め称えてくれてたから
...私は、冬山を選んだ。
捜して直ぐに小さな山荘が破格で手に入
った。

真冬には雪で道が失われる、人里から見放された一軒家。
既に雪深い季節で、辿り着くには除雪車を市に要請しなければならなかった。

灯油ストーブがあるから、煤塗(すすまみ)れの暖炉(だんろ)だったなら放っておいた。
けれど手入れされた煉瓦造りの暖炉はく小ぎれいで、横には薪の束を積んだ山がある。
屋根から落ちる雪の振動以外に音ひとつ無い室内では、赤々と部屋を照らす暖炉の炎が勇ましく感じた。

暖炉前の温まった床に座ると、炎は私の頬をも赤く染める。
もしも隣に彼がいたなら...。
きっと、着てるこのセーターを剥ぎ取って、こう言った。

「火照ってるみたいだな」

そうして温まった手が下着の下から房を驚づかみし、太い指が薄紅の輪をそろそろと撫で回
る。

優しい刺激にうっとりとする頃には輪の先端が引き締まり、秘密の泉も湿り始める。
それでもまだ泉を荒らさずに、指を輪から逸らして先端をキツくねじる。
痛みで喘ごうとする唇は唇で塞がれて、喉声を直接彼の口の中に送ってしまう。

「いたっ...も、う...」

そんな涙声も彼は受け止めてくれる。
力が弱まり、先端から房へじんわりと血が巡って安らぐ開放感を与えられる。
そして膝を私の足の間に喰い入れて、泉に蓄えた蜜が十分だと量ると、床に私を転がして開い
た両腿へと腰を落とす...。

私達の相性は語るまでもない...。
肌の接触も、呼吸の乱れも唇の動きも...何もかもが、火種になる。

炎が——

燃え盛るふたりに対抗して勢いを増してゆく。

肌表面も内側も喰い散らかす...そんな摩擦と吐息の熱に嫉妬をして。

濡れた床の上辺を乾かすのがせいぜいだと諦めた炎は、やがて...勢いを失う。

...そんなひと幕を想い描きながら、消えかかった暖炉に薪をくべて情熱を焚きつける炎と過ごした。

1日でも彼を待つのは辛かった。

翌朝の雪は窓枠すれすれまで積もり、表面が氷の粒のようにきらきら光っている。

窓から外へ出て雪を掻き分けて裏庭行き、目印に立てていた鉄パイプに向かった。

その周辺を掘り起こして全身に汗をかいた頃に、青いシートに包んだ固まりを見つけた。

シートをバリバリと引き剥がすと、ここまで試行錯誤した結果が...そこにあった。

「あなた...」

もう、他人の目を忍ばずに済む。

雪解けの季節に大きな冷凍庫が届けばあなたは生涯私のもの...

私達は運命の下で出逢ったのだから。

何もかもが順調に進んでいたのに、さよならなんて有り得ない。

買ったばかりの冴えた包丁が首を横に滑っただけで彼の悪ふざけは終わった。

この山荘と巡り逢った私達は車で山奥へと走った。

世間から脱したあの日、銀嶺を照らしていた朝焼けの色は荘厳だった――。

私の素肌を褒め称えた彼が、今では冷たく白ずんでいる。

そして、くちづけたら懐こく張り付こうとする。

「あなたのキスは...いつでも痛いね」

あなたしか出来ない、私だけしかもらえない前戯に満悦した。

でも、それが彼との最後のキスになってしまうなんて。

引き裂かれる前に、せめて、もう1度...

部屋に戻って暖炉を焚きたかった。

あの、嫉妬深い炎だったなら、きっと...

銀嶺の麓に赤々と灯るパトカーの警光灯を、"野暮"だと一緒に嘲笑ってくれたらろうに。

2010-02-01 22:30:00



...今から桜が蕾をつけてるようじゃ、大学入る頃には散ってるなあ。

彰人(あきと)は校舎裏の桜並木の前を歩いてプレハブ造りの部室に入った。

バスケットボールを詰め込んだカゴをどかして窓を全開にした途端に突風が吹き込んだ。

土埃混じりの風は、あっさりとした短めの髪とジ

ャケットを乱した。

(あーっ！)

腹立たしさを込めて窓を閉めると、部室内に軽い衝突音が籠(こも)った。

(今日は卒業式だったのに、ボサボサじゃなか)

取り急ぎ、窓硝子に映った薄い影を頼りに髪を指で梳(す)いて直した。

ここからは高校すべてを囲む緑のフェンスが見えるが、その向こうを歩く制服姿はない。

今日は部室とお別れをする為に、朝練が始まる時間よりも早く家を出た。

3年は彰人ひとりだけで、あとは全員後輩だから気兼ねなく別れを惜しめる。

勿論、同級生がいても、彰人のように朝早く来て感傷に浸ろうとするとは限らない。

ただ...もしも同級生がいたら、部をまとめる苦勞も分かち合えただろう。

たったひとりの2年生という理由だけでレギュラーでも無かったのに顧問に部長を押し付けられ、それからの1年間は精神的に辛かった。

(反抗的で個性の強い後輩達、天気屋の顧問、バスケが好きでただ俺...)

騒々しかった部室を呆けた顔で見渡し続ける。

「バスケが好きじゃなかったら放り出してたんだけどな...」

独り言を漏らしたその時、硝子をはめ込んだ安造りのドアを女生徒がガラリと開けた。

「牧野お〜」

同級生の神田小睦(さちか)だ。1年の時は女子バスケ部だったが秋には止めていた。

バスケに自信があったのに、先輩優先で補欠にもなれなかったのが悔しかったそうだ。

以来、時間を持て余した小睦は、外見を様々な色で塗り変えるようになった。

最初は素朴で可愛らしい印象があっただけに、突然伸びた黒い睫毛と白っぽくなった髪には驚かされた。

特に親しくは無いが、何度か停学処分を受けて話題に上った彼女の名前は忘れづらい。

「やっぱりい〜牧野来てたじゃん、そうだと思ったんだあ！」

「神田？なんだよ」

彰人が訊(き)くと、小睦は一瞬口を結んで開け放したドアの縁に寄りかかり、正面のドア枠をじっと見ながら言った。

「っと...牧野さあ、偉かったね。飛びぬけて下手だったのにさ頑張ってレギュラーになってさあ」

「部長だからレギュラーじゃないとカッコつかなかったから先生が決めただけだって」

すると小睦は大きく首を振った。

「何言ってるの？動きがぜんぜんスマートになったの分かって無いの?!」

何故か驚いているような、怒ったような言い振りだ。

「こないだの引退試合なんか超活き活きしてたし」

やたらと自分の事に詳しい小睦を前にして彰人は戸惑っていた。

(...俺、そんなに目立ってたっけ?)

首を傾げる間にも小睦は積極的にしゃべっている。

「あたしさあ、牧野見る度に後悔してた。良く考えないで部を辞めちゃったコト」

そう言ってピンクの口紅を塗った唇を尖らせた。そんな小睦は幼くて可愛く見えた。

「楽しいコト、他に無くてえ」

「そうかあ？俺から見たらやりたい放題って感じだったけど」

そう言って軽く笑った彰人を、小睦は淋しそうな表情で見つめた。

けれど部室に一步踏み出すなりドアを閉め、彰人を見上げた時には笑顔を作った。

「そ！あたし、見たまんま。人の言う事聞かないしい。牧野がバスケ上達してる間...いろんな経験しちゃったし」

そして、口端を上げた小睦の口紅の艶めきが増した。

「...ね、知りたくない？」

妖しく笑う瞳に覗き込まれた彰人はそっけなく答えた。

「それより、ブラシあったら貸してくれよ」

小睦は、一瞬浮かべた悔しそうな顔を彰人から逸らすと小さな声で言った。

「いいよ」

スカートのポケットから短いコームを取り出して彰人に差し出した。

「これしか無いけど？」

さっきの何か企んでるような艶は唇に無い。彰人はドアへ近づいて手を伸ばした。

「さんきゅ...！」

コームを受け取ったその時、いきなり小睦が彰人の制服の両脇を握った。

そして微かに引き寄せられたと想った次の瞬間には、小睦はドアを開けて走り去った。

「...おい?!」

訳がわからない。

借りたコームを使うのを躊躇いながら見た時に、金ボタンのひとつが雲っている事に気付いた。

原因はすぐに分かった。表面に口紅の脂が着いていたからだ。

数える迄も無く、上から2番目のボタンだ。

...その時、小睦が自分の事に詳しく理由も見つけた。

走り去った後ろ姿を想い浮かんだ拍子に、彰人は胸の奥で絞られる痛みを感じた。

口紅を拭こうとした袖が、一瞬だけ...止まっていた。

(神田はただの同級生だし、さっきの妙な質問も突き放せた。気がつかないフリしてりゃ終わりだ)

教室に行くとは別れを惜しむ生徒達は慌ただしく、彰人は小睦と目を合わせる事も無かった。

式が終わって校舎を出る迄の間に、第2ボタンを欲しがる女生徒が何人か訪れたが、いくつもボタンを持ってはしゃいでいる女子を見た後では感激も無く、渡す気にもなれなかった。

大学を卒業した数年後、同窓会では来ていない小睦の話題が上った。

「神田、輸入ショップの店員してんだな、何回か見かけた」

居酒屋の一室の端で男の声がすると、知ったかぶりの元・女子が話しに乗った。

「あの子のいたチームさあ、トップ連中が逮捕されて解散したんだって。ヤクザ絡みだったみたい」

「小睦も逮捕されそうだったって聞いたよお？怖くない？」

いかにも怖がっている素振りをする女子達の盛り上がり、教師が口を挟んだ。

「一度チームの連中と知り合いになったら最後、メンバー扱いになって抜けさせてもらえなくてな。警察に間に入ってもらって卒業直前に解決出来たんだ。お前らも親になったら色々苦労するぞ」

当時の苦労を語った担任教師は深い溜息を吐き、彰人はただ顎で肯いた。

しばらくして茶髪の小睦が部屋のドアを開けた。

話題が他に移っていて良かった...と皆のほっとした顔が告げている。

小睦は彰人の後ろを通り過ぎてテーブル奥の教師に挨拶に行った。

誰の目から見ても小睦は派手に振舞っていた高校の頃よりも瑞々しくなった。

今の生活が充実しているのだろうと簡単に想像出来る。

「小睦」

彰人が小睦の両肩にぽんっと手を置いた。すると小睦は照れくさそうに瞳を潤して教師の顔を見た。

2人で教師に一昨日入籍したと報告をすると、狭い部屋が驚きの声で沸き返った。

冷やかしながら質問攻めをする同窓生に、彰人は小睦と付き合い始めたきっかけを語った。

彰人が借りたコームを直接小睦の家に返しに行ってから意識し始めたのだと。

けれど、どうして郵送で済ませなかったか迄は言ってない。

無言の告白が印象に残り過ぎて、もう少し小睦と話しをしたくなかったのだとは...勿体無くて話す気になれなかった。

2010-03-01 22:00:55



ほっそりとした指先がすっと南を指した。
夜空を見上げる由美の顎はすっきりとして
いて、細い黒髪がはらはらとそよいでいる。
仄かな色気を感じながら康太(こうた)が由美
の頬にかかる髪を避けてやると、少し目尻を下
げて微笑んだ。
「あれが、あなたの星座」
バルコニーよりも周囲の建築物が低いお陰で

、2人は何にも遮られずに煌めく星々を眺められる。

そして由美は次に、並んで強く輝いてる2つの星の右側を示した。

「あれが、獅子の心臓...レグルス」

呟き声と共に指先が康太の胸を小突いた。

そしてもう指を動かさないまま由美は康太を見つめている。心臓の鼓動を感じているようだ。
知り合ってからすぐに康太は由美の一挙一動に惹かれた。

出逢ってから数ヶ月が経った今日、初めて狭いベランダに出て2人で夜空を仰いでいた。

バルコニーの隅に転がっている数本の蝋燭が由美の目に入った。

そしてその側には鳥の羽根や羽毛が何かにこびり付いて風に飛ばされずに、はためいている。

「素敵な夜景ね」

しっとりとした笑みに見惚れていたのだろう。

由美を眺めていた康太が苦笑を浮かべて語り始めた。

「...俺は見栄っ張りだね。親の遺産を使い果たした後も、生活レベルを下げられなかった」

康太の瞳は星の数にも勝る灯りで照らされているが、表情に明るさは感じない。

「借金が無ければ、今すぐにでも君と結婚したのにな。苦労させるのは目に見えてる」

憂鬱な声でそう打ち明けながら由美の細い背中を撫でた。

「...人生を後悔したのは初めてだ。今は君と逢えない時間は、がむしゃらに働いてるし、ここも
来週引越す」

そんな懺悔を聞いていなかったのか、由美は夜空を見上げて呟いた。

「あなたは素晴らしい人よ...お金の事さえきちんとしたのなら、行って欲しかった」

「どこへ？」

由美はしばらく答えなかったが、少し悪戯めいた微笑を浮かべて唇を開いた。

「旅立てば、置き去りになった身体は骸(むくろ)と呼ばれるけど、その変わり...行き着いた先には
哀しい運命も弱肉強食の掟も無いの」

「まるで天国の話をしてるみたいだな」

「ええ」

ええ...と由美はもう一度言い、康太の両肩に腕を巻きつけた。

康太に突然の心臓発作が起きたのは、翌朝だった。

呼吸をせずにベッドで横たわる康太の横で由美は呟いた。

「本当なら、獅子座を遥かに超えた天の国へ行けたのに...金運欲しさに悪魔に縋(すが)ったりするから...」

語りかけていた相手は康太では無く、白い手の上に乗っている輪郭がぼやけた光の渦だった。そして壁を透り抜けてベランダに出ると、羽毛に張り付く黒ずんだ血痕を懐かしそうに眺めた。

彼はここで悪魔に祈りを捧げていた。だがそれは数年も前の事だ。

「私達が出会ったのは、3年も前になるのよ。私はきちんと金運を与え続けてたのに...」

悪魔に力を使わせておきながら生贄を欠かしたからには、契約終了と見なすしかない。

本人の魂を奪わなければ...力を使ったままでは、この身が痩せ衰えてしまう。

そして由美は手の平に唇を寄せ、光の渦を小さな唇から吸い込んだ。

薄っすらと微笑んだ由美の白い肌に明るさが増し、頬は薔薇色に紅潮した。

けれど...呑みこんだ魂を身体に吸収したにも関わらず、苦しい程の虚無感に襲われている。

...気紛れにでも彼と話すんじゃなかった。

星の数と比べようが無いほど年を過ごしているのに、今になって初めて失う痛みを知るとは...

あの日以来、春の夜空のレグルスを見上げる度に、いつの間にか鼓動を感じた指先にくちづけしている。

凍りつきそうな満たされない心を、ほんの少しでも温められたいが為に。

2010-04-01 22:39:52

5月：ゴールデンウィーク

ゴールデンウィーク初日に、早紀は実家に向かう電車に揺られていた。

電車を降りてバスに乗り込んだ早紀の目に、懐かしい田園風景が通り過ぎ、通り過ぎ、通り過ぎる...

いつまでも続く田畑の中、たまには屋根瓦の重そうな邸宅が建っている。

広そうな庭の上空では、人間が何人も入れそうな鯉のぼりがいくつも並んで悠々となびいていた。

冷えた空気が去るに従って空が青を取り戻した。

あの鯉のぼり達は冬の名残りを飲み込んでいるのだろうか。

それとも綿菓子のような白雲を？

...出来れば、ついでに...

気がつけば、哀しく願いながら小さくなる鯉のぼりを眺めていた。

「さすが田舎だね。都内じゃあんな大きいの見ないよ」

「なに都民ぶってるんだよ、ひとり暮らししてまだ1年だろ？」

久々の家族揃っての夕食時、1歳上の兄に笑われた早紀も照れくさそうに笑った。

「早紀ちゃん、服持って来た？靴、大丈夫？」

母が言っているのは黒い礼服の事だ。早紀は母の得意な天ぷらを頬張りながら答えた。

「もっできた。大丈夫」

「...早いよねえ。てっちゃんが死んでからもう1年になるなんて」

しんみりと言う母に同意した家族が“てっちゃん”の思い出話を始めた。

早紀は急いで目の前の惣菜を平らげた。

「お？早紀、そんなに食うのに困ってたのか？」

茶化すような言った心配顔の父に手を振り、ごちそうさまと言って座布団から腰を上げた。

「お風呂、行って来るわ」

そう言って廊下に出ると、ガラス戸に透ける広い空を見渡した。

思い出を語り始めたら一週間でも終わらない。それよりも先に涙が声を邪魔してしまうだろうか。

“てっちゃん”は兄と同じ歳の従兄弟(いとこ)で幼い頃から仲が良く、恋心を感じた16歳の頃に胃潰瘍で入院をした。

それから彼は何度と無く入退院を繰り返した。

おかしいと想ったのは早紀だけでは無いだろう。

何度目かの退院の後に早紀は我侭を言って、彼に遊園地に連れて行ってもらった。

「懐かしい～！ここ小学生の時には良く来たよね。あの象の飛行機まだあったんだね」

「ほんと久々だな。あ、早紀、今日の事も忘れんなよ？」

気になる言葉を耳にした早紀が顔を見ると彼は楽しそうに言った。

「今日奢(おご)ってやるぶん、覚えておけよ？」

夕陽が熱かったあの日、頭上で大きな鯉のぼりが風に叩かれてバサバサと音を立てていた。

さんざん2人で笑って過ごした後、出口へ向う前に早紀はたどたどしく訊(き)いた。

「ね...てっちゃん、もう、入院しないで済みそう？」

入院する必要が無いと答えたら、早紀は告白するつもりでいた。

「定期検診次第だな」

中途半端な結果に顔を曇らせた早紀の背中が軽く叩かれた。

「心配ありがと、暗い顔すんな」

以前より少し痩せ、髪は少なく細く見えた。

それでも爽やかに見える彼の笑顔が、早紀の不安を逆なでした。

「ね、本当はなんの病気なの？胃潰瘍じゃないんでしょ？！もし今度入院したらあたしに出来る事ない？」

哀しい顔をする早紀に彼は茶目っ気たっぷりに笑って答えた。

「行きつけの病院は完全看護だからなにも無いし、胃潰瘍だよ。俺デリケートだから胃痛とお友達なの」

「嘘...！あたしが何もできないと想って...！」

声と一緒にぼろぼろと零れた涙が、柔軟剤の香りのする袖で拭かれた。

本当は、あの冗談で笑いたかったのに、笑えなかった。

(なんでそんなに隠すの？一緒に遊んで育ったのに、あたしは他人でしかないの...?)

悔しさが涙をどんどん誘引する。

その時、ちょこっと唇にかさついた感触がふれた。

「あ、悪い」

慌てて顔を早紀から離れた彼は、間違っつてぶつかったかのように、そう言った。

今の感触に驚いた早紀の涙が止まり、呆然とした顔で返事をした。

「...ううん」

泣きやんでする事は、笑うしかない。

早紀はどうしてぶつかったのか訊かずに、指で唇を押さえて痛いふりをした。

彼はその指に手を添えると早紀をひっくり返しそうなほど強く押し付けて笑った。

「痛い痛い飛んでいけ！」

「馬鹿じゃん?!飛んでったの、てっちゃんじゃないの！」

部屋に戻った早紀は、タンスからパジャマを引っ張り出してひとりで怒っていた。

彼が病院から出られなくなってから、親戚の間で癌が末期に入ったと知れ渡った。
隠しても分かってしまう事なのに、最後まで彼は早紀に病名を言わなかった。
病気の辛さも、愚痴のひとつも、ささやかなキスの理由さえも語らずに...

「彼、男だったよね...」

決して忘れられない。

奢られた事も、笑ったことも...限りなく頑固だった事も。

立ち上がろうとした早紀の視線が止まった。

この部屋の窓からは、バスから眺めた鯉のぼりがシシャモよりも小さく見える。

どれだけ願おうと、人の哀しみなど到底飲み込めそうに無い、無力な小魚だ。

そして視線を下げれば庭に萌えはじめた新緑と白とピンクのサツキ、名の知れない雑草の花々が咲いている。

けれど今の早紀の涙でぼやけた目には、色だけしか分からなかった。

...彼は、深い思い出を残さないようにしてくれた...

その思いやりが伝わり過ぎていて、切な過ぎて、彼を失った哀しみを膨らませる。

これが最後と想いながら早紀はパジャマに顔を埋めて泣いた。

雲ってしまう空ばかりを眺めていられない。

気がつけば、早紀の世界は彩りはじめていた。

2010-05-01 22:05:00



名所巡りをしていた舞は、一軒の家に辿り着いた。

田畑が広がる周辺には観光客も民家も見当たらない。

昭和初期の重そうな瓦屋根の母屋は遠目で観るよりも大きかった。

一般の知名度は低いですが、この庭に建っている大きな白い蔵は建築的に大切な資料になっているようだ。

建て付けの悪くなった母屋の玄関は開きっぱなしだった。

中へ踏み込んでみると粘土質の土が露わになった土間の奥は何の仕切りも無く、突然高くなった板の間が広がっている。

本当は彼と一緒に来る筈だったのに、急な膝痛を訴えられて仕方なく今日はひとりで歩き回っていた。

「せっかくだから予定通り行っておいで」

観光ホテルのロビーで舞は亮(りょう)にそう言われた。

亮が好きな文学者の生まれ故郷。

この旅行を突然言い出したのは亮だったのだから残念だろうに、彼は顔にも出さずに「一緒に居たい」とスネもせずに笑って舞を見送った。

...もしかすると、亮にそれほど感心持たれてないのかな？

少しの不安を湧き立てつつ灰色の空を見上げた。

今は雨期に入っていた。

天気が怪しいと分かっているながら、亮の突然の膝痛の為に薬局で湿布を購入したりと慌ただしく、傘の事をすっかり忘れていた。

...亮に傘を持ったか訊かれたのに、後回しにしちゃったんだっけ。

旅費が安いから亮は連休も無い梅雨の今を選んだと言っていた。

お互いに将来は医師を目指しているものの、今は20歳の貧乏学生でしかない。

心配していた雨が降ってきた。しかもざあざあと。

この家の中で雨やどりをするしか無い。

止まなかったら濡れて帰る覚悟で、舞は板の間に腰を降ろした。

紙が剥げた障子や襖の木枠が部屋の名残りを伝える程度で、当時の家具も展示されていない寒々しい空間だ。

それでも妙に懐かしい気がするの、和の寂(さび)を感じるからだろうか。

「...行かないで」

今、そんな声が聞こえた。

肌と心臓に鳥肌が立ちそうな程の恐怖を感じた。

...辺りを見回しても誰もいない。

一度見回したら怖くなって後ろも前も見られなくなって俯いた。

ふいに「遣(や)らずの雨」という言葉を思い出した。

帰ろうとする客を引き止めるかのように降り出す雨の事だ。

落ち着きを取り戻してみても、ようやく分かった。

言ったのは自分の胸の中だ。

切ない想いが何度もこの言葉を繰り返している。

「行かないで」

目を閉じた舞の頬に涙粒が零れた。

真っ暗な筈の瞼の裏で、学生服を着た青年へと今の姿の舞が哀しい声で言っていた。

ここでは無い。場所はさっき庭で見た白い蔵の中だ。

窓の格子がそう語っている。

「行かなかったら犯罪者になってしまう。君は君で幸せになってほしい」

学徒動員...

舞達女学生はこの土地の武器工場で働く為に、疎開(そかい)を兼ねて家族と離れて移住した。

けれど、ここで奇跡的に出逢えたと思っていた青年は戦地へ動員される。

あの日、舞に首を横に振った青年は、人を殺すのが嫌だと書いた遺書を残して蔵の頑丈な梁(はり)から首を括った。

...誰にでも親身になる、心の優しい人だった。

非国民扱いされかねない遺書は家人によって処分されたが、首を吊ったという噂は狭い村に簡単に広まった。

...私の言葉が彼を追い込んだのでは...

舞は長年自分を責めて泣き暮らしていたものの、戦争が終わると実家へ戻って親に言われるまま結婚をした。

「あなたは、どこにも行かなかったのに...」

そう呟いた時、異変が起きた。

――カタ。

降る雨を突き抜けるかのように、母屋に物音が届いた。間違いなく庭の右手...蔵の方向だ。

...もう、ここにいるのは怖い！！

そう願っても震える足の爪先迄が血の気を失い、腰にも力が入らない。

...ああ。

舞は感嘆の吐息を漏らしていた。

彼に逢ってしまえば、何も怖くなかった。

首を吊った為に、顔中の穴から流れ出た体液の染みが白いシャツを汚している。

死んだ時の姿は悲惨だったろうに、優しい顔立ちに色は無く、誠実な瞳も以前と変わらない...

。

音も無く彼は近づき、舞は軽やかに立ち上がった。

彼が少し小首を傾げた。

キスをする寸前の愛しい彼の癖だった。

あの頃は懸命に爪先立ちをしたのに、今は頭の高さがほとんど同じだ。

衣服は汚れているのに、医学部での解剖実習で知った血生臭さを感じない。

...他人の血を流してたらこの程度の姿では、済まされなかったよ。

彼は生前そのままの姿でいられる理由を言って笑い、舞は笑った目を閉じた。

彼の唇が重なった気がした。

温もりがあるように想えた後、舞は微かに目を開けた。

...いない。

ふれる対象など、土間の上にはいなかった。

唇にふれているのは溢れた涙。

あの頃、彼と添い遂げられなかった哀しさだけだった。

外では、乾いた土の上で雀達が小さく弾みながら鳴いている。

誰もいなくなった母屋を出た舞は、蔵の前で手を合わせて青年に別れを告げた。

来た時は閉まっていた蔵の分厚い木戸が開いていたからだ。

とにかく今出来る事はこれしか無いと想った。

そしてホテルに戻ろうとした舞の視界に亮が映った。

「すれ違いにならなくて良かった...痛みが引けたから追ってきたんだけど」

「なんで？休んでれば良かったのに」

「いや。舞ひとりで知らない土地歩かせるなんて俺どうかしてた。急な膝の痛みもだし...なんか
気味が悪くなってのんびり待ってらんなかった」

舞が無事でホッとした...と、亮が言ったその時、蔵の木戸が小さな音を立てて閉まった。

亮は心臓が飛び出す程驚いたものの、すぐに風のせいにした。

舞もそういう事にして怖気づいている亮を笑った。

...あの蔵の中には、もう誰もいない。

もしいたら、優しい亮の隣で笑っている舞へ祝福の笑顔を送ってくれている筈だ。

キスの前に必ず囁いてくれていた愛の言葉を言わずに、違う事を語った。

優しくった青年は永い間ここにいて、自分自身を責めたままこの土地を去った舞を心配してく
れていた。

ずっと泣き明かしていた舞の誤解を解きたかったのだと...舞にはそう想えた。

時代に翻弄された遣らずの雨と入れ替わりに、今年の梅雨の一粒が舞の手の甲にぽつりと染
み込んだ。

2010-06-01 22:00:00

「昔は”露草”を”月草”とも言ったんだよ」

虫取り籠を首から下げた陽菜（ひな）が、幼いながらも「ふうん」と祖父の声に相槌を打つ。雑木林の枝を通り抜けた朝日が、虫取り網を振る陽菜を涼しげに照らしている。

保育園が休みの日や時間外の時など、共働きの両親は頻繁に陽菜を祖父に預けていた。祖父は定年後に警備の仕事に就いているが、休日は若い社員が中心になる為に休みが取りやすい。

娘夫婦には願ってもない便利な存在だった。

手を繋いで道を歩く間に、祖父は植物にまつわる話を語る。

虫取り、花火、西瓜割り...川でも海でも数え切れない遊びで夏を上手に使いこなす。祖父を大好きな陽菜は、話が少しぐらい難しくても蝉の声と一緒に聞いていられた。

「この葉の形は弓張月（ゆみはりづき）...半月に似てるだろう？」

朝を待ちわびて咲く青い小花は、いつも月のように折った葉に円らな露を乗せている。

払っても払っても翌朝には露を抱く月草。

雫を落とした後は萎えてくしゃくしゃになる青い花に、老けた自分が重なる。

ふれたら簡単にぽとりと弾かれる大粒の露。

きらりと光った露さながらの、あどけない瞳が祖父に向けられた。

「あーあ。だいじに抱っこしてたのに、おっこちちゃった」

祖父は少し驚いた顔をした。

「ああ、いいね。陽菜、その発想はとてもいいよ」

祖父は陽菜の頭のとっぺんに手の平を置いてぐるぐると回す。

「おじいちゃんには、涙を落としてるようにしか見えてなかったなあ」

白髪混じりの眉毛が、くしゃっと寄る。

「昼にママが迎えに来るまで、露草と朝顔で色水でも作るか？」

そう言うと、陽菜のふっくらした指は祖父の手からさっさと離れて露草を摘み始めた。

祖父も同じく露草を掴んでは虫カゴに入れた。

不思議なもので、昨日まで泣き濡れていた露草の葉が、今は哀しみを癒そうとする月草として目に映る。

（どうも、孫には素直だなあ）

自分を可笑しく想った祖父は、口端をぴくりと動かす。

けれど数時間後への憂いが笑いを止めさせた。

もう、娘夫婦の離婚手続きは済んでいる。

2人の心は、青花で染めた布のように素早く色褪せた。

ここから陽菜が帰るのは3人で暮らしていた一軒家では無く、四角いマンションの一室だ。

次の連休も陽菜は祖父に預けられるだろう。

大きな瞳に涙を溜めるだろうか、大人に対して意地を張るだろうか。

残念な事に、悲哀の感情は褪せ難い。

(健康だけしか取り得の無い自分に果たして何が出来る...)

自分自身が根無し草のように頼りなく想える。

突然、奇声染みた高い声を出して陽菜が背中に乗かった。

「あああー！おじいちゃんの方が多いい〜っ」

黙々と摘んでいた祖父の虫カゴの中は青一色でぎゅうぎゅうになっている。

ほんのり湿ったやわらかな手が首にふれ、丸いおでこが頬にぶつかった。

そして陽菜は頬に、ご褒美のちゅうをむにゆりと押しつけた。

唐突に、祖父の視界が眩く白澄んだ。

熱い意志が、胸の奥で膨らみ上がっている。

小さな孫を抱き上げられないほど筋肉が削げ落ちようと、受け止める心も包み込む腕も自分には残っていた。

祖父は光の中にいる陽菜をぎゅっとお腹に抱き寄せて言った。

「陽菜、そろそろ帰ろうか？」

「うん！」

花摘みに飽きた陽菜は祖父の手をぎゅっ握り、大きく頭を上下に振った。

2人は枯れゆく草花に背を向け、細い木漏れ日の外へと歩き抜けた。

2010-07-01 22:00:00

人波に押されるかのように、大耶(ひろや)は改札の間を抜けた。

コンコース沿いのファーストフード店の自動ドアが開き、冷えた空気が外へ流れ出る。

「大耶さん、ここ！」

ドア沿いのカウンターで、ミルクティー色の長髪の渚紗(なぎさ)が指をひらつかせている。

渚紗は大耶の恋人・梢恵(こずえ)の後輩で、今年23歳になったばかりだ。

「外、暑く無いんですか？なんか、ぜんぜんダレてなくてさわやかなんですけど」

爽やかと言われた30歳近い大耶は苦笑を浮かべた。

「いや、暑いよ。仕事の緊張感が残ってるのかな」

「あ。お仕事、お疲れ様あ。ごめんなさい、我がまま言って」

長いネイルの先をふっくらした唇に当て、大きな目できょろりと大耶を見上げた。

可愛らしい渚紗に厭な気分は起きない。

『一度だけで諦めます。私と2人だけの時間を作ってくれませんか？』

そんな控えめなメールを渚紗から受けたのは先月だった。

大耶がOKの返信をすると、渚紗は職場の最寄り駅前の祭りを指定した。

商店街沿いの通りでは、連なる提灯に灯りが点っている。

アスファルトの照り返しこそ無いが、19時を過ぎた今は昼よりも蒸し暑さが増していた。

あと1時間だけ歩行者に開放されている大通りに出ると、渚紗が早々にかき氷の屋台に目を留めた。

「大耶さあん、あれ」

じっとしてても汗が滲み出る最中、渚紗の細い肩が大耶の腕に寄りかかる。

けれど暑苦しさは髪の甘い香りに誤魔化されていた。

「どうぞ。どれにする？」

訊かれた渚紗は、さっと氷小豆の札を指差した。

「ごちそうさまで〜す」

カップを持った渚紗は満面の笑みを大耶に向けているが、その眼差しは捕らえた獲物を見るかのように強い。

渚紗がカップを右手から左手に持ち替えた。

冷えた指で大耶の腕を握り、耳に唇を近づけて言った。

「金魚すくい、しません？私、得意なの」

冷んやりとした息が耳を透った。

「ほら」

服の下に隠れた豊満な温もりが、柔らかに密着する。

「金魚、持ち帰らなくていいって書いてあるし」

耳朶（たぶ）に渚紗の冷たい唇が触れた刹那、汗ばんだ肌が涼やかに癒され、頭の中は熱気に侵された。

――もっと長く感じていたい。

人目もはばからず、今すぐに渚紗の肩を引き寄せたい衝動に駆られる。

熟した手触りを味わい、冷えた果実を舌に絡めたい。

時を忘れて熱帯夜を越えるんだ――。

それでも渚の唇が耳から離れると同時に、大耶は欲望を掻き消した。

(彼女に誘惑されに来たとは云え...きつついな)

渚紗を腕から遠ざけてハンカチで額の汗を拭う。

「大耶さんが行ってるジムって...」

再び腕に触れようとする渚紗へ、大耶は厳しい口調で言った。

「もう止めてくれないか？梢恵から恋人を奪うのは！」

渚紗は怪訝な表情で大耶を見上げた。

「言い逃れするなよ？君は俺を誘っただろ」

渚紗は大耶から離れて不機嫌な調子で訊いた。

「梢恵さんの彼氏じゃないの？いつもと違って痩せ気味じゃないなどは想ってたけど」

すると大耶は残念そうに苦笑混じりで答えた。

「違う。その振りをしてた幼馴染。梢恵から君と縁を切りたいって相談されたんだ」

「ふうん。だったら大耶さんに用は無いの。じゃあね」

あっさりと言を返す渚紗の目の前に大耶は回り込んだ。

腕でも握ろうものなら、痴漢扱いをされて逃げられるのが映画やドラマの常だ。

「梢恵に恨みでもあるのか？君のやってる事はストーカー紛いだらう？」

穏やかに訊く大耶を、渚紗は睨み上げて言った。

「何か悪い？梢恵さんが好きになった人に興味あるんだもん。それに、梢恵さんには男より仕事と友達を大切にしたいし」

子供染みた身勝手な言い分は、大耶をカッとさせた。

「悪くない？梢恵の信頼を引き裂いておいて?!」

大耶に手を上げられると想ったのだろうか、渚紗が「ひっ」と息を引きつらせた。

だがすぐに渚紗の視線の先を見て大耶は納得した。

言い争いをしている2人の延長線上に、黒髪をさらりと流す梢恵が立っている。

渚紗の憧れが、形となって存在していた。

凜とした瞳が印象的でありながら、繊美な彼女からは威圧感も刺々しさも感じ無い。

美容院に入りたての渚紗を熱心に指導してくれ、屁理屈や疑問をぶつけても渚紗が理解するまで一緒に悩んでくれた優しく頼もしい女性。

「...渚紗。あなたと待ち合わせの店に行く途中だったんだけど...」

戸惑った口調だが、黒い瞳はしっかりと真っ赤になった顔の渚紗を見据えている。

渚紗は、大耶の浮気の現場を梢恵に見せるつもりだったのだろう。

ありがちな計画が失敗に終わった事を3人は覚っていた。

「...私、梢恵さんと逢う迄、こんなに人を好きになったことなく...」

泣きそうに眉を歪ませた渚紗が、手に持つカップに視線を落とした。

カップの中の小豆が泣き濡れた瞳のように淡い氷水の底に沈んでいる。

(...もう、十分泣いたような気がする)

大きく肩で息を吐いた渚紗へ、梢恵が声をかけた。

「渚紗？普通の友達としてなら...私は歓迎したいんだけど？」

その一言を聞いた大耶が今度は大きく息を吐いた。

(...よく、そんな事が言えるよ)

3ヶ月前、居酒屋の座敷で梢恵が泣き崩れた。

「私に彼が出来ると、仕事の後輩が横取りするの。彼女は言い寄って無いってシラを切るし...どうしたらいいの?!」

「横取りされた彼氏達は？その子が大勢抱えてるわけじゃないだろ？」

大耶が胡坐（あぐら）を崩しながら訊くと、梢恵は息を吐いて肯く。

「渚紗は浮気がバレて私と別れたら彼女も別れを切り出すみたい。彼氏は謝ってくれたり、そのまま消滅ね...」

「変な子だな。よっぽど可愛いんだろうけど...」

やがて梢恵は握り締めていたグラスの酒を一気に呷った。

「...許せないの、私。恋人を奪いたがる渚紗がイヤ。あの子に誘惑された人達もイヤ...でも一番イヤなのは、謝られても許そうとしない私っ！このままじゃ、人が信じられなく...！」

梢恵は苦しい想いを吐き出していた途中で、テーブルの上にぐったりと潰れた。

幼馴染としてしか近づけなかった高嶺の花が、自己嫌悪を抱えているなんて想ってもいなかった。

(...梢恵らしくもない。いいや？らしいのかな...。優しすぎる)

大耶は苦い感情を嘔み潰す。

(偉そうに恋愛相談に乗ってる身分じゃないだろう。こっちは梢恵の存在感が大きくて恋が長続

きしないっていうのに)

それでも帰りまでには、暇潰しだと言って梢恵におとり捜査を提案した。
新しい恋人だと渚紗に紹介させたのはその翌々日だった。

「大耶、本当にありがとう」

煌めくビル街の夜景を背景に、笑顔の梢恵と乾杯をした。
深刻な話が無い今日は、開放的なホテルのバーに来ていた。

「この何ヶ月かで、少しは俺を見直した？」

「勿論」

渚紗は”頭を冷やす”と言って職場を辞めた。
まだ梢恵の携帯にメールは来るが、近況程度でこちらを探るような内容は無いそうだ。
大耶は、グラスのロックアイスをカラリと回して苦い笑いを堪えた。

情けない事に”かき氷”を見ると、渚紗の魅惑的な冷気と柔らかな感触を思い出す事がある。
そんな時は、必ずといって身体が熱を帯びる。

振り切ったつもりの誘惑は棘のように根深く残り、情動を疼かせた。

だが平常心の今は、そんな淫猥な渴望と梢恵の元カレ達を嘲笑出来た。

(渚紗に言い寄られたら断れないよな…。でも俺だったら浮気じゃないし、前向きに付き合える)

梢恵に企みがバレた後、潔く身を引いた事を考えれば可哀想だし可愛く想える。
大耶は迷いながら梢恵に訊いた。

「渚紗のメアド変わってない？」

「え？変わってないけど、どうして？」

瞳を瞬く梢恵に、グラスを手にした大耶が照れたような笑いを見せた。

「新しい職場に変わったろ？励ましてやろうかと想って。渚紗は、お子様だから誰かが付いててやらないと…」

そう言いながら梢恵から顔を逸らしていた。

他の女と付き合うかも知れないなんて話を梢恵に言わなければならない自分が悔しい。

「だめ！」

梢恵の声がはっきりと聞こえた。

「もう…誰にも好きな人を取られたくない」

驚いた大耶が見た梢恵は哀しげだ。けれど視線は渚紗に負けないほど強い。

大耶は左肩と耳を梢恵に傾けた。

「もう一度、言ってくれる？」

「...好きになってたの」

不安げな小声が、温かな吐息に混ざって大耶の耳から浸透する。

瞬く間に全身が痺れる程の感激を見舞った。

「私だって...まだ、大耶に付いててもらわないと...」

たどたどしい告白に大耶が笑いを交えて問い直した。

「まだ？もう少しの間ってこと？」

梢恵は頬を紅潮させた。珍しく怒らせたらしい。

「意地悪ね、弱さなんて簡単に克服できないの！」

突然、真面目な顔をした大耶がテーブルに手をつけて身を乗り出して耳元で囁いた。

「克服しなくたっていい。梢恵の言ってる弱さって優しさだろ？そのままいいよ」

梢恵は釈然としないのか、唇を噛み締めている。

「俺はずっと、いるから」

すると梢恵は目を閉じ、微笑みを浮かべて肯いた。

束の間、大耶は梢恵の背後で煌めく夜景に目を奪われた。

そして渚紗と過ごそうとした一夜の衝動を鼻先で笑う。

(梢恵に冷えた温もりを教えた方が何万倍も幸福感に満たされる)

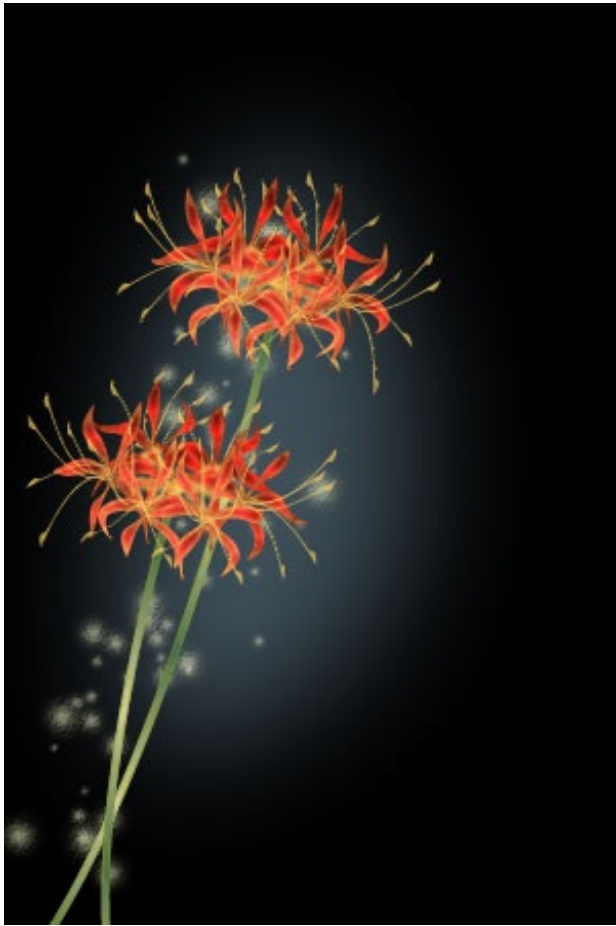
梢恵は口許にかかった細い髪を指先で払い、なめらかな首のラインを露わにした。

立ち上がって梢恵の肩に手を添えると、彼女はバッグを手にした。

肩に回そうとした大耶の指先が、梢恵の火照った耳に触れる。

短い夏の後には、彼女のやわ肌を模索しろと言わんばかりに。

終わりのない熱帯夜が、刻々と近づく――。



あの年は、9月に入ろうとも蝉の鳴き声は村中に響き渡っていた。

多くの田畑は稲刈りを終えて土色に戻ったものの太陽の熱は強く、蝉の声と入り混じって耳の奥までじりじりと焼き付きそうだった。

「芳明様は14歳におなりでしたっけ。お父様が塾に行く際は洋装を仕立てるとおっしゃっておられりましたが上京を？」

縁台に腰掛けていた芳明は膝まで捲くり上げていた小倉袴の裾を慌てて下げた。

肩に捲くっている小振袖はそのままに、齒並びが恐ろしく悪いハツの皺だらけの手に差し出された湯のみを黙って受け取った。

肯いた視線の先にいるのは薄くなった白髪をようやく日本髪に結っている老婆ではなく、その奥で白い両足を横に崩して座る32歳の珠代(たまよ)だった。

歩くと片足を引き摺りはするが、30を超えても瑞々しい彼女の紺地の浴衣の衿合わせは豊かな胸の膨らみに圧されるままに曲線を描いている。

ハツのように日本髪を結わずに湿った黒髪をひとつに縛っているだけなのは行水を終えたばかりなのだと芳明は承知していた。

芳明が珠代と過ごした一番古い記憶は5歳の頃、この庭で大きな盥(たらい)に入って行水した眩しい夏だ。

母にとっては語り尽くせず口にもしない憎い恋敵の珠代を、芳明も一時は蔑みもしたが、姉のような存在で幼い頃から可愛がってくれた彼女を結局は認めた。

彼女の項(うなじ)や黒目の行方に心騒ぐ今となっては憧れの女性でもあり、珠代に寄り添われて酒を注がれる実の父を嫉みもする。

「ああ、騒々しい。露西亜(ロシア)との戦が終わったと想ったら、もう花火の時期とはねえ」

ハツはしゃがれ声でそう言いながら、珠代が肘を付いている卓袱台(ちゃぶだい)の上に急須を置いた。

今宵は、年に一度の秋祭りだ――。

陽が西に傾き始めた今、林向こうの通りから活気づいた男達の下駄の音が聞こえる。

男達が汗で肌に張り付く着物に少しでも風を取り込もうと、大手を振り大股で歩いている様子が手に取るように伝わる。

賑わいには女達が去年の祭りを愉快気に語る声音とかん高い笑い声、そして子供達のはしゃぎようも乱れ込んでいる。

この2階家は村外れであるが為に日頃は誰も寄り付かないが、日暮れと共に人が増した。

ここは花火が打ち上げられる川の上流で幾つもの村々が一望出来る森林が切り開かれた高台に在る、飲み騒ぐには絶好の場だった。

芳明も幼い頃から父に連れて来られ2階から花火見物をしていた。もう10年来続くだろうか。父が都合を付けられなかったのも、その父に了承を得てひとりで訪れたのも今年が初めてだった。

「騒々しい？ふふ、たいして聞こえやしないでしょうに」

珠代が団扇を仰ぐ手を止めて紅い唇の端を小さく上げて言ったが、やはりハツには聞こえなかったらしく独り言のように話を続けた。

「そうそう、お方（かた）様、笹屋の後には店が何軒か建つそうで。多くの墓を背にした場所で繁盛するのやら」

珠代の眉が微かに曲がったが、湯のみに茶を注ぐハツはそれにも気付かず話し続ける。

「夜明け前から飯の支度に掃除と洗濯...座る暇も無く給仕やら床作り。やっと寝ても客に呼ばれて叩き起こされれば病にかかりやすくもなりますわ...」

「醜女(しこめ)は得ねえ。何十年も笹屋にいながら縫うばかりでお墓に入らず、終(つい)は安穩とお茶汲み」

そう皮肉を言って団扇をひと仰ぎした珠代の後れ毛がふわりと浮き、風は膨らんだ浴衣の衿合わせに届かんとしていた。

ほんの少し首を傾げる珠代が手にする団扇からは仰がずとも豊潤な色香が漂う。村の男達にとっては遠目であろうと、花火を眺める珠代の艶姿も酒の肴だった。

(ハツが笹屋にいた...?)

芳明の胸に黒灰色がもやりと燻り立つ。幼い頃から知っているハツを侮蔑してしまった心中に気付かれまいと視線を彼岸花の紅い花弁へと逃した。

女郎を飯盛り女として置いている宿屋は珍しくない。ただ「江戸」から「東京」へと名が変わる以前から続いていた笹屋が店をたたむ話題は、遠方の花街の出来事ながら若い世代の耳に入る程広がっている。

時代の流れを惜しむ声だけではなく、その店の飯盛り女達が次々と死んだ過酷な状況も噂の的だった。

「今晚旦那様が来られないなら、芳明さんの好物を並べましょうかね」

曲がった背中の頂点に乗る太鼓結びの帯が重たそうな足取りでハツは台所へ向かった。

芳明は妙に胸が安らいだ心地で庭を見渡した。

この広い庭には、彼岸花の他にもまだ長雨を知らない夾竹桃(きょうちくとう)が咲き残っている

春先は白根葵(しらねあおい)、蓮華躑躅(れんげつつじ)が東風に浮かれて華やぎ、冬は水仙や福寿草がこぢんまりと清楚に佇(たたず)む。

何時の季節でも花が絶えない庭だった。

「芳明さん」

横で膝を着いた珠代の唇の紅は彼岸花にも劣らず凜と冴えている。

「...枯れてる朝顔、僕が取り払おうか？」

手入れされている庭に不釣合いな茶色の蔓を指差すと珠代は一時口を噤み、小指を唇に当てて笑った。

「芳明さん、ご存知ないのね、朝顔は種を使うの。墮胎に有効なんですって」

なんですって...という事はまだ種を使った事が無いのか、芳明は驚くと同時に胸を撫で下ろしていた。

(珠代さんにそんな事はさせたくない)

それに彼女が子供を産んだら兄弟が出来る。一人っ子の自分には、かけがいのない存在になるだろう。

「ここにいらしても退屈でしょう？2階から村人達の様子でも眺めませんか？」

軽やかに誘われ、しっとり指先を重ねられる。芳明は彼女の浴衣の帯に取り巻かれたかのような浮遊した心地で階段を昇った。

「父さんが来ないのに僕だけが来てしまって...」

硝子窓を開けようとする珠代の背中に今更詫びると、振り返り様に小さく笑われた。

「秋祭りの日に初めて離れて夕食を召し上がる旦那様には、私が作ったお箸を贈りましたの。せめて私といると感じていただきたくて。芳明さんがいらっしゃらなければ今日の日は無意味ですよ」

黒い瞳に見つめられた芳明は父に妬きながらも、喜ばずにいられなかった。

ほんの少し開けた窓から薄い風が届く。珠代の唇からもやわらかな溜息が漏れた。

「とうとう私の背を越えて...」

芳明の短髪を撫でた白い両手の指がゆっくりと首を沿って肩に降りた。

その指が再び首へ戻ると小振袖の懐を潜って脇をくすぐり、紅い唇が顎にふれた。

「遊郭には、もう？」

既に...とも嘘も答えられない間に汗ばんだ頬に珠代の絹のような頬がしっとり張り付く。「そう」という小声と身体の揺れ、下腹部の衣擦れの音と共に芳明の袴の紐が弛んだ。

「すっかり大人の男になられたのね」

珠代の浴衣の袖から細い腕が現れ、ふわりと細い腰紐が首に巻きついた。

「十分ね。あなたは十分、生を謳歌した...」

意味も問い質す暇もなく、ぐいっと首に巻きついた腰布の交差は芳明の項(うなじ)に回り、倒れてしまった拍子に背中と珠代の膝がぶつかった。

一心不乱に珠代を振り切りたくて立ち上がろうとするが、呼吸出来ない苦しさを訴えるかのよ

うに踵で床を叩いてばかりいた。

紐にしがみついて手繰り寄せようとしても珠代は訓練でも積んでいたのか、あの細い指にも腕にもふれることは不可能だった。

「あなたが...」

苦しみの絶頂のさ中、興奮した珠代の金切り声が耳を突いた。

「あなたさえいなければ私の子は歓迎されたの、私の背を越えてたのに——っ！」

首を絞める紐がぐいぐいと弾力がある護謨(ゴム)や暴れる蛇さながらに動く。

「どうして同じ時期にっ！ずっと奥様は授からなかったのに、私が身籠ってから、どうして?!」

抵抗し続けていたと想っていた芳明だったが、女の興奮した声に感化されたのか錯乱した珠代に隙が出来たのか、思い切り引いた紐は珠代の膝を床に落とさせた。

急激に喉に入った空気で咳き込みながらも咄嗟に巻きついていた紐を首から外した。激しい咳か何かで喉が切れたらしく、口の中が苦い。

この紐をどうしてくれようかと握り締めて、目の前で呆然と自分を見る珠代の汗が流れる首に目を止めた。

途端に芳明の身体の中に冷たい液体が流れ、凍える寒さに頭上から襲われ身震いをした。

信頼していた者に裏切られ、憎しみと罪悪感にも塗れた。瞬く間に。

何処から紐解けば時間が戻るのか、微かな弛みも無い混乱。今先刻の修羅場は冗談だったと現実から逃避したいのに僅かな空間も見つからない。

「...ずうっと、あなたが憎くて、なのに大きくなる姿は見ていたかった」

震える声でそう言ったのは、床に足を投げ出した珠代だった。汗が滲んだ浴衣の背と黒髪しか芳明に見せない。

「あなたの半分は私の子で...」

その言葉で芳明の混乱は哀れ心ひとつになった。息を切らしながら馬のように手を床に着き珠代の目の前に回り込むと、呆けた顔で窓を見上げて顎から涙粒を落としている。

芳明は掠れた声で珠代を呼んだ。

「...お母さん」

憔悴しきった芳明の顔を見た珠代は怒りもせずに口端を上げて笑った。

ふわりと首に巻きついたのは紐のような細いものではなかった。しっとりと汗で濡れた白い腕が冷えた身体と共に芳明に抱きついた。

芳明は涙で濡れた頬に頭を寄せ、そして珠代の頬を拭うかのように涙に唇を押し当てた。

「芳明様、お方様、お食事でございます〜」

しゃがれた声が階下から届く。暢気なその声を聞いた2人は抱き合いながら、くっと胸で笑った。

ハツの手料理を食べた後、何事もなかったかのように3人で肩を並べて2階の部屋から花火を眺めた。

そして例年と同じように一泊した芳明が隣村の屋敷へ戻った時に白髪混じりの母が息急き切って語ったのは、父の急死についてだった。

食事中に倒れた芳明の父は、妻の縁者との宴席に粗作りの箸を持参していたと云う――。箸からは毒物が認められたが、どこで手に入れた箸だかは語らず謎のままだった。

珠代は何一つ財産を譲り受けられないまま芳明の母に家を追い出された。

ハツを看取ってやって欲しいと珠代に懇願された母は、唯一の情けをかけて老婆を掃除婦として屋敷で雇ったのだった。

やがて、珠代が伯刺西爾(ブラジル)への移民船に乗り、亭主と日本から去ったという噂が芳明の耳に入った。

「結局、珠代さんとは花火を見たのが最後になったな」

庭に堕ちた紅葉を竹箒でざっざと掃くハツを眺めてひとりごちると、耳が遠い筈の老婆が何故か肯いた。

「お方は運の強いお人よ。何があろうと越えて行かれる」

ハツが屋敷に来てからというもの、自分が産まれる前後の話をさんざん訊いたものだった。

「お方は笹屋に売られたその日に旦那様と巡り逢いなさった...以来、高額を払って占有されてまして。まこと命の恩人ですわ」

はっきりと珠代の身籠った子供が自分の種だと分かっている芳明の父が、彼女を身請けする話は順調に進んでいた。

しかしその途上で35を過ぎた妻が初めて身籠り、身請けする条件に墮胎が加えられたのだった。

既に腹が大きくなっていた珠代は3階建ての笹屋の屋根から飛び降りる。躊躇した珠代の背中を押したのは他でも無い、隠して産みやしないかと思届ける為に来ていた芳明の父だ。

瀕死の珠代の呻き声の果てに引き摺りだされた息絶えた赤子は芳明の父が危惧していた男子だった。

珠代達女郎の世話係りだったハツを口止めを兼ねて見張り係として雇ったのだろう、とハツ本人は言った。そして芳明は珠代が箸を渡した件を警察に言わなくて良かった、とつくづく背筋を寒くして想う。

珠代が自分に箸の事を口止めしなかったのは捕まるのを覚悟しての事だろうが、彼女に少しでも罪滅ぼしが出来たと想うと気持ちが軽くなる。

「父さんには...恩は感じてても愛情は無かったんだろうな。大怪我をさせられ自分の物にもならない小さな家に十年も押し込められて」

芳明がそうぼやくと、ハツは首を傾げた。

「芳明様のご成長と訪問に目を細めていらしたわ。なにしろ運が良いもんだから、どこでも喜びを見つけられて...」

「おまえも運が良いんだろ？実は耳も良さそうだ」

急な切り替えしにも動じず、ハツは皺の寄った唇を笑わせた。

芳明は陽に透けた紅葉を見上げながら、あの2階家だったら今頃は彼岸花が咲いているだろうか？そう思い起こす。

珠代が日本から去ってから気付いた事がある。珠代は財産など貰わ無くとも今、幸せなのだろう、と。

あの家の庭を占めていたのは、無言で憎しみを語る美しい毒草の群れだった。

紅陽堕ちを待たずに急速な肌寒さに襲われ、身を震わせる初秋の夕べ。

忘れようとしても巡り来る苦い芳潤に満ちた季節――。

2010-09-29 22:00:31

10月：運動会

「聞いた？来年から運動会が5月になるんだって！」

6年2組の教室にそう言って飛び込んだのは今井士郎(しろう)だった。

一斉に知ってる派と、知らない派の返事が飛び交った。

「そんな情報古いつて。中学校はとっくに5月だし」

「本当?!練習ってどうなるの？」

知らない派の大野梨未(りみ)は、声も出さずに啞然とした表情で士郎を見ていた。

士郎とは同じ幼稚園で、小学校の低学年まで日常的に喧嘩をしていた。

口が達者な梨未に対して、言葉よりも行動が先に出る士郎は手をあげたり物を投げつけた。

一度モップで殴られて鼻血を出してから梨未は言い過ぎない思慮を身に着け、士郎は我慢を覚えた。

けれどその事件のお蔭で、小学校6年生になった今も梨未のママは士郎の事をよく想ってない

。

『あの子に近づいたら駄目よ!?!いい?できるだけ無視しなさい!』

そんな命令を、ママは思い出したように発令する。

何度も嫌なヤツだと想おうとしていたけれど、士郎を嫌ったり出来なかった。

士郎は5年生の終わりから、ぐんっと背が伸びた。

学年でなんとなく目立っていて、なにかと頼りにされる。

士郎は誰よりも気持ちが真っ直ぐで、瞳が明るい。梨未は時折り、それが嬉しくなる。

なのに誰よりも梨未から離れた所で士郎は他の同級生と笑っている。

今年で秋の運動会は最後だ。

梨未達小学生よりも、先生達の方がその想いが強いらしい。

晴天に恵まれた高い青空を何度も仰いでは、風の無い大気を深く吸っていた。

6年2組は明るい男子が多く、応援にも熱が入っている。

「今井!次の50m、トップで頼む。赤組に20点負けてっかんな」

「おっけー。応援よろしく!」

同級生とのやり取りを椅子に座って眺めていた梨未は想う。

(トップにならなかつたら応援のせいにするんでしょ?)

あの会話の輪に入って士郎に冗談を言いたかった。一緒に笑いたい...

昼食の後、ダンスも玉入れも終わってしまった。

梨未は、心臓がばくばく大きく開閉するみたいに感じていた。

(ただでさえ緊張するのにい)

背の低い梨未は騎馬戦で当たり前のように上に決定され、馬のひとは士郎だった。

「大野。俺達は後ろに回るから、さっさと帽子取っちゃえよ」

士郎に声をかけられた…。ぽかんと口を開けた後で、慌てて首を肯かせる。

「...うん！」

士郎に笑い返したのは幼稚園ぶりかな…。心の中で密かに自分を褒める。

(うん、頑張るぞっ！)

なのに、気合いを入れた数分後には、梨未達の騎馬はもみ合いになった。

ふ...っと梨未はバランスを崩した。自分を支えていた足場がまばらになる。

青空が斜めに見え、不安が胸いっぱい押し広がったのは一瞬だ。

———ガツッ　！———

梨未は口を打ち、直後に肘が何かにぶつかった。

砂を撒いた校庭に膝と肩を強かに打った。

(い...たっ...口がずきずき痛い)

落ちた衝撃の直後、唇にさわった指先に血がぬるりと着いた。

「大丈夫かっ?!」

先生達の声と地面を蹴る音が近づいた。

担任は顔を上げて座り込んでる梨未よりも先に、うずくまっている士郎に駆け寄った。

砂塗れの士郎が顔を手で覆ったまま担任に抱き起こされた。

「今井、手をどけてみる...」

担任が声をかけたその時、梨未の呼吸が引きつった。

士郎の手の甲に、真っ赤な血が溢れ出ていた...。

「...前歯を折ったか。他は、痛いところは無いか？」

残念そうに担任が言っている間に梨未に副担任が駆けつけた。

運動会の振り替え休日の次の日から、早速同級生の冷やかしが始まった。

「おまえら、わざとバランス崩してキスしたんじゃないの？」

「うわ、激しすぎっ！」

そんな冷やかしを右から左へ聞き流して、梨未と士郎は一緒に行動をするようになった。

『騎馬戦は危険だ』

父兄と教師の多くが今回の事故を看板のように掲げて来年度からの騎馬戦が中止にさせられそうになっていた。

責任を感じた2人は職員室やPTA役員になっている生徒の家を訪ねて回った。

中学3年。

美味しそうなやわらかいオレンジ色。小さくて厚みのある金木犀の花。

梨未は枝に顔を寄せて、うっとり甘い香りを吸い込んだ。

「懐かしいね。騎馬戦を止めないでくださいってお願いして回った頃も金木犀がいっぱい咲いてた」

学校へ行く待ち合わせ。少し遅れて来た士郎がそう言った。

「悪かったな。あの時はずいぶん歩かせちゃった」

「でもあたし達のせいで騎馬戦が中止にならなくて良かった」

すると士郎は梨未から目を逸らして小声で言った。

「あ...あれって、ほんとは梨未と一緒にいたかった言い訳だったんだ...」

梨未にはハッキリと聞こえた。そして士郎が振り返った時、梨未はずんずんと先に歩いていた

。

追いついた士郎が梨未の肩をつかむと、突然頬をはたかれて引っかき傷をつけられた。

「それならそうと先に言ってよ！ぶあ〜か！あたし、重い気持ちばかりで...！」

怒りながら梨未は頬の傷を撫でた。

「ごめんね」と言うと「うん」と快い返事がされ、2人はいつものように並んで歩く。

まだ朝早くて誰も来そうにない。この時間は誰に気兼ねせずに2人でいられる静寂な廊下だった。

突然、士郎が梨未の腕を引っ張って鼻の上で言った。

「ファーストキス...やり直せないか」

真面目な声と顔に梨未は簡単に肯いた。

「...うん」

唇の先に柔らかな肌が、つんと当たった。

ゆっくりと、お互いの唇の弾力を感じる。

———あったかい

「やわらかいな」

「...うん」

2人共、相手の唇をなぞって笑う。

士郎の両腕が梨未を包む。梨未も士郎の背中に手を回した。

そして2人は唇をむぎゅっと押し付け合った。

しっかりと士郎の背中を抱くと、その分士郎も梨未を強く抱き締めてくるようだ。

想っていたよりも人の体温は熱く、士郎は頑丈で安心感を作り出す。

急激に士郎への”好き”が膨らんだ気がする。ずっと、このままいられたら良いのに...と願った。

「コアラみたい...」

「うん、コアラになりたいよな」

「だあめ。士郎は木でいいの。木になってしっかり支えてよ」

つまらなそうな顔をする士郎を可愛く想いながら、その肩に頬を寄せた。

ふいに士郎が小さな声を出した。

「……あ！」

同時に梨未は慌てて左肘を脇に降ろした。士郎の指から胸をガードする為だ。

「…ごめ。……でも、いいよな？」

士郎の戸惑った声から、今さわったのは計画では無いと伝わった。

(…いいかな?)

一瞬、そう思った。

けれど、士郎の目は妙に潤んでいる上に、不自然に見開いている。

深海魚に憑依されてるような不気味さが漂う。

この頃の梨未は知らなかったが、生まれて初めて欲情した男を目の当たりにしていた。

「何がいいわけ？勝手に触らないでよねっ！」

梨未は嫌悪を感じたまま士郎の腕から出ると、そのまま廊下を走り去って他の生徒の足音が聞こえる迄トイレに隠れたのだった。

…それでも相性とは不思議なもので、喧嘩をする度に理解を深め合った2人は、明後日結婚式を迎える。

執念深い梨未のママを肯かせるのが最大の難関だった事を言うまでも無い。

「やられたよ。みんな同窓会のノリで明後日出席するんだろうなあ」

「なあに？」

渡された手の平サイズの白いカードは、来賓に配る新郎新婦のプロフィールだ。

「ファーストキス、やり直した意味なかったな」

笑い混じりの士郎の声に首を傾げながら梨未はカードを開いた。

まじまじと見ないまでも、一目で印刷を注文する時に無かった手書きの項目が飛び込んだ。

「やだっ！”初めてのキス”なんて欄は無かったのに！」

顔を真っ赤にして悲鳴に似た声をあげた梨未に士郎は笑いを押し殺して言った。

「小学6年の時、みんなの前で堂々と、だって」

梨未は絶句したままカードを穴が開くほど睨んでいる。

士郎はそんな梨未の耳をくすぐるように唇を近づけて訊いた。

「B型の味って書き足す？」

「ふざけないでよ！」

怒声が士郎の耳をつんざく。

しかし梨未が赤くなっているのは照れている為だと解り切っている士郎は、暢気に綿棒で耳掃除を始めた。

「これ、親戚だって見るのに！もおお～っ、どうしようっ！！」

誰ひとり見逃しはしないだろう、赤ペンで「強烈だった」と書かれてしまっては。

2010-10-02 22:00:00

南部に走る山脈は2方向へ分かれており、山間にはいくつもの村が点在する。

奥深い森林で銃声が鳴り響く。

「ちえー。仕損じた」

若い猟師が舌打ちをすると、背後の猟師仲間達が苦く笑った。

「今の獣は熊とも大きな犬とも見分けがつかなかったろう？ありゃあ、神がかりの男じゃねえか？」

「神がかりの男の寿命を奪った者の寿命は縮むって言うぞ、そう悔しがるな」

「撃ったところで、執念が消える迄死なずに彷徨うってさ。弾の無駄だ」

仲間達から慰めを受けた若い猟師は大きな溜息を吐いて言った。

「祟りだの禁忌だの、多過ぎて覚え切れねえよ。第一、その男が獣になった縞利(シマリ)村は山脈を越えた向こうだろ？何十年も生きて、しかも狩られずにここまで辿り着ける筈がない！」

「それもそうだけどよ、この寒さで冬眠しない熊はいねえよ」

その後、僅かな沈黙があった。

情報が氾濫し法律が浸透した今でも、古来からの悪習を続けている部族がすぐ近くに在るのだ。

国が野放しにしている限り、怨恨に火が点けば先祖が我慢を重ねて保ってきた平和が崩れるか知れない。

獣になった哀れな男の御伽噺も猟師の仲間内に止(とど)められている。

何十年も前、縞利(シマリ)村には村長の長男・羽生(ユーション)という屈強の男がいた。

彼自身も20歳前の若さながら、若手を率いて狩りに出向いたものだった。

その日、羽生が川の浅瀬に足を入れた少年に注意した。

「魚は放っておけ。武器を持って冬陸(トンシン)川を渡ると森神様の祟りがあるぞ」

「武器が獣の爪に変わるって祟りだろ。信じてるのか？」

「信じるっていうか、災いは御免だろ？」

仲間に冷やかされた羽生はそう言っておおらかに笑った。そこへ、その背後の山道を横切る人影と仲間が挨拶を交わしたのだった。

「寒い中、手ぶらで何処へ行くんだ？」

「手ぶらじゃねえよ。美華(メイファ)の結婚祝いと餞別に鏝(やじり)を届けに行くところだ」

男は毛皮のベストの内側から小さな麻袋をひとつ取り出した。

だが、羽生に振り向かれた途端に男の動きが固まる。

「美香が...結婚?!」

羽生と美香の恋仲は村の誰もが知っている。

仲間たちは銘々に、隠していた美華の嫁入りの過程を口にした。

「美華の親父さんの腕はいいんだが、去年辺りから獲物が少ない。借金して銃を買っても使えず
終いじゃ...」

「益々借金が増えてるんだろ？」

「昨日、相当な支度金を貰ったって話だ」

表情も筋肉も鬼のように強張るばかりの羽生を前に、皆の身体は縮込まっている。

「それじゃあ、身売りと同じじゃないか！」

声を張り上げた羽生に歳の近い若者が返答した。

「買われたんだろ。行き先は大鋤族自治区の波武村ってところだ」

村の名前を聞いた羽生は息を大きく呑み込んだ。

そこは山脈を2つ越えた向こうの村。人の足では行く迄に一ヶ月は費やす。

「今、あの村には年頃の女が少ないんだと。それであちこち出歩く行商人が結婚相手捜しを頼ま
れてるそうだ」

「相手は病弱な男らしい。男が死んだら村に戻って来るだろうよ」

ここにいる皆が「仕方ない」という諦めの表情をしていた。

村人は、ほぼ自給自足の細々とした生活を送っている。

羽生の父は村長と商いをしていて少しは生活に余裕がありそうだが、美華の家族と借金までは
負えないだろう。

「美華は、金に眩むような女じゃないっ！」

羽生は捨て台詞を吐き、村へ向かって駆け出した。

「もう美香は新婦の室に入って嫁ぐ準備をしてる！男は禁止だぞ」

「...今から断ったら、美香の家族が罪人にされてしまう...！」

数々の忠告が届いていないかのように、羽生は一度も肯かずに木立の中へと姿を消した。

「...父さん！」

羽生が怒りに任せて向かった先は父の許だった。

村の産物を売買する父が一番、行商人との接点がある。

倉庫の中に山と詰まれた絹織物を前に記帳していた父は、息子の怒声を覚悟していたらしく、
ゆっくりと振り向いた。

「父さん、あんたが美香を売ったんだな？！」

父は掴まれた腕を振り払おうともせずに冷静に語った。

「あの商人の悪辣加減は耳に入っている。村の女をさらわれるよりも先に、村長の私が内密に貧
困の家族を説得して回ったんだ。実際は3人要請されたが、無理だった」

「...俺は、あんたから、いろんな事をさんざん教え込まれてるんだ。この国の部族の事も...！」

「商人は”切羽詰ってる”と脅すように言っていた。真っ先に見目の良い美香が支度金も無しに連れ
去られるのは目に見えるだろう」

そして怒りを身体で受ける心積もりで両目を閉じた父を、羽生は放るようには手離した。

この村では嫁ぎ先が決まった娘は、2本の神木の間に住つ小さな小屋「新婦の室」に嫁ぐ日まで籠る仕来りがある。

男が近づいてはならない場所と言われているが、世話をする者が見張りをしているわけでも無い。

羽生が木戸を数回叩くと、内鍵を外した美香が軋んだ音と共に現れた。

数日振りの再会を喜ぶ間も無く、羽生は美香を腕に抱えて質素な室内に押し入って叫んだ。「美香！時期を延ばせ！じゃなかったら今、俺と村から出るんだ！」

腕の中で返事もせずに口を結ぶ美香に業を煮やし、羽生は縋る気持ちで伝えた。

「知ってるのか？おまえが行こうとしてる村は、夫が死んだら妻を殺して一緒に埋めるんだ！！」

やはり...知らされてなかった。

美香は黒い瞳を驚くままに大きく見開き、唇から足先まで全身をがくがくと震わせている。

「それとも、一緒に死のうか？」

「お願い、嫁がせて！」

美香は慌てて首を横に振り、羽生の胸にしがみついて訴えた。

「これからは家族8人が飢えなくて済む！牛を買えれば乳が取れて、子牛が生まれれば...」

「俺は？美華」

大粒の涙を零して俯いた美華に、ほんの数日前の出来事を語った。

「俺はおまえ達家族を養うと言い、おまえは肯いた。後はおまえの両親に話すだけだったのに?!」

「.....」

美華は無言のまま、自分を責める羽生の肩に腕を回した。

一瞬見た美香の顔は何も言うまいとして奥歯を喰いしばっていた。

小さな唇を僅かにでも開いたら、恐怖と悲哀が止め処ない悲鳴をあげさせかねない。

羽生は震える肩を包み込み、黒髪に唇をすべらせた。

「美華...」

細い髪を透して聞こえた声へ、美華は返事の代わりに肯く。

羽生は耳にかかる黒髪を甘噛みし、愛し尽くした柔肌を掻き毟(むし)るかの如く確かめる。

甘い心地良さから漏れたかつての喉声はなく、室内は互いを貪(むさぼ)るかの如く荒々しい息遣いだけが交わされていた。

「羽生...」

明け方に別れるまでに美香がやっと声にしたのは、その一言だけだった。

翌昼、華々しいドレスを着た美香が商人が手配した輿に乗って村から去った。

羽生は日を追う毎に頬が窪れ、眼光が厳しくなり人付き合いも悪くなった。

父の商いを継ぐふりをして人知れず金と武器を掻き集めている。美香を護る為に最新の銃とい

う長い武器をも手に入れ練習にも励んだ。

自ら孤独に落ちた羽生の部屋に父が訪れて、こう告げた。

「落ち着いて聞け。二ヶ月前に美華の夫が死んだと行商人が言いおった」

「冗談は止めろ！ここを発ってから...半年も経ってな...」

言葉を言い終える前に、微動だにしない父から真実なのだと思います。そして疎ましそうに父から目を逸らすと両手で大きな袋を抱えて家から飛び出したのだった。

波武村への近道に、例の冬陸川が流れている。広くとも浅い川を躊躇する余裕はない。

だが、川の中央で羽生の動きが止まった。山道を歩く若者達が羽生を目にし、その異変に言葉を失った。

彼等が息を呑む音に気付いたのか。熊に似た巨大な獣は、細い木立の間を走り抜けて行った。

「崇りだ...神様の罰を受けたのか」

若者のひとりが驚き、他の者が悔しげに言った。

「あんまりだ...」

そして傍に転がっていた材木に腰を下ろし、泣き伏すを耐え頭を抱え込んだ。

※※※

深い森に積もる濃淡様々な色の木の葉。

細い葉を身につけた木々の枝の間からも細い陽光が差し込む。

見上げれば晴れ渡った空は青深く、その時の雲は白だ。

——何年経とうと何も変わっていない。

なにひとつ、変わらない。

自然も時間も表情ひとつ変えずに過ぎ去ってゆくだけだった。

ひとつを失っただけで砕けた心が、此処に在るのに——！！

語れぬ破片を代弁したかのように、銃声が山間に轟き渡った。

「ちえー。仕損じた」

獵師達の笑い声が遠ざかると、木陰で鎮まっていた巨大な影が動いた。

やがて廃れ石が崩れた墓地に辿り着くと、傷塗れの獣が枯葉の中に鼻を突っ込み、くんくんと土の匂いを嗅いだ。

——これだ！！

土を掘り起こしている獣の鋭い爪が剥がれてゆく。

数本の白骨を掘り起こしたが、骨格が大きい髑髏が現れると他を探った。

幾度も抱き締め、その都度頬を寄せた細い髪が土に混ざれて現れる。

やがて、幾筋もの髪が巻きついた泥塗れの骨を引き摺り出す。

——ここに...いたのか。

砕けた骨にこびり付いた泥汚れを落とすかのように夢中で舐め続ける。

嫁いだ後にどんな目に合ったのかは、知りたいと想わなかった。

最後に逢った時、殺される為に嫁ぐのだと教えて恐怖に落としてしまった。

その上、美華を責めた自分が...今となっては一番憎い。

そうして何度も掘り起こしている間に、雪がひらりと舞い落ちた。

宵闇に差し掛かると極度に気温が下がった。周辺の木々が緊張し、冷えた静けさに染まった。

心も根も疲れ果て、温めるつもりで白骨の上に覆い被さった。

「ごめんな...必ずおまえを救うつもりだったのに言わずに...怖がらせて...」

空を見上げると、ふっくらした大雪が枝をすり抜けて、自分を目掛けて舞い落ちるかのように感じた。

異国の織物に描かれた天使の翼を思い起こす。

不思議と、冷え切っている筈の無言の骨から微かな熱を感じ取った。

疲れ切った身体が春の日向にいるような、心地良い眠気に誘(いざな)われる。

爪の剥がれた男の指が伸びた。

雪が積もった一本の骨が握り締められ、ふれた唇が微かな声で囁く。

「おやすみ...」

2010-11-01 22:00:43

地名・人名等はフィクションの異世界ものです。

冬眠する動物を使ったり...

縞利→シマリス・ 大鋏→オオクワガタ とか f^_^;

これは救われない物語のようですが、冬眠があれば春の目覚めもあるので...



会社帰りに彼と待ち合わせたのは、高層ビルの角にあるロシアの家庭料理店だった。

街のネオンは聖なる夜空よりも騒々しく煌めいている。

「はい、これ」

4人席の窓側に座った結奈（ゆな）は、付き合っ
て2年目の斗真（とうま）にクリスマスプレゼント
を渡した。

彼は「ありがとう」と軽く笑って中身も見ないで
ポケットに入れた。

入れ替わりに斗真がジャケットのポケットから銀
細工の平らなペンダントを出して結奈に手渡した。

「このトップ、俺がスプーンの柄を加工したんだ」

なんだか、いつもより強い口調だった。

今更言われなくても既に知っている。彼は歯科大学時代に技巧を学ぶ途上で銀細工に目覚めた

。でも正直言ってありがた迷惑、銀はお手入れが面倒だ。

「ありがとう」

苦笑いする結奈の前に、斗真はもう片方のポケットから小さな箱と布を取り出して置いた。

ご丁寧に銀製品用のクリーナーとクロスも付けてくれたのだ。

「結奈？こっちへ来て」

言われるままに隣に座る。肩にかかる髪をよけられ、着けているペンダントにそって斗真の指
が首にふれる。

（やだ...）

出逢ってから初めて斗真に嫌悪を感じた。

このプラチナのペンダントは鍍金（メッキ）みたいな輝きで安物に見えるけれど、トップの百
合の透かし彫りが気に入って買った超お気に入りだった。

何年も着けていた。

友達のひとりだった斗真（とうま）と付き合うようになったのも偶然では無いほどの巡り合せ
を感じている。

今では御守のようにも想えるこのネックレスを外すのは哀しい。

だけど、斗真を傷つける方が辛くて断れない。

そして...遂にペンダントが外された。首が寒く感じて直ぐに、新しい銀のペンダントを着けら
れた。

「聞こえた？このクリーナーは俺専用。ペンダントは何十年先も俺がメンテするって」

「え？」

耳を疑う結奈に斗真は小首を傾げて訊いた。

「掃除人付きネックレス。どう？」

結奈は大きく肯き、ぽつりと答えた。

「...最高」

そう言うと肩を斗真に引き寄せられ、涙が流れ出そうになっていた目尻にそっとキスをしてくれた。

「斗真...」

キスを返そうとした結奈だったが、料理を手に近づくウェイターを目にすると慌てて席に戻った。

そうして2人は感激のまま食事を終えた後、指輪を買いに宝飾店へ向かった。

せめてこれだけは身に着ける本人の好みを優先してもらわなきゃ——ね？

2010-12-01 22:00:26